國學院大學學術情報リポジトリ

津波の語り：三陸地方の津波石

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 國學院大學大学院文学研究科 公開日: 2025-05-21 キーワード (Ja): 津波石, 震災遺構, 地域の実態, 信仰, 心意 キーワード (En): 作成者: 北村, 規子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002001646

津波の語り

—三陸地方の津波石—

Narratives about Tsunami :

Tsunami stones in Sanriku Region

北村 規子

キーワード：津波石 震災遺構 地域の実態 信仰 心意

关键词：海啸石 震灾遗迹 地区实况 信仰 精神传承

要旨

津波によって打ち上げられた巨礫を津波石という。東日本大震災後、話題となった津波石がある。

岩手県宮古市羅賀とハイベ海岸、大船渡市吉浜、大船渡市赤崎町、気仙沼市唐桑の5つの津波石である。東日本大震災で上がった津波石はハイベ海岸と唐桑の2つであり、他は明治三陸大津波や昭和の三陸大津波など、過去の天津波のときに上がったと伝えられている。

津波石を自然の脅威を伝える震災遺構として行政は扱っている。しかし、各地域ではさまざまな話が語られているとわかった。姿を現すために津波を呼んだと考えられている石もあれば、遺族から空の墓と認識され、年に一度お参りするものである一方、地元では海上安全の神として拝まれていた石もある。

なぜ、石によって語られる話が違うのか。津波被害を含めた地域の実態が反映しているのではないかと考えた。それらを明らかにしながら、本論では語られた話の奥にある信仰や心意を考察した。

摘要

被海啸冲上岸的巨石被称为“海啸石”。在东日本大地震之后，这些海啸石引发了人们的广泛关注和讨论。

岩手县宫古市的罗贺和HAYBE海岸，大船渡市的吉浜与赤崎町，以及气仙沼市的唐桑等地均有海啸石。其中，HAYBE海岸和唐桑的两块海啸石是在东日本大地震时由海啸冲上岸的。而其他地区的海啸石据说是由明治时期的三陆大海啸，昭和时期的三陆大海啸等过去的大海啸中被冲上岸的。

行政部门将这些海啸石作为了传递自然威胁的震灾遗迹进行保护。然而，各地对海啸石的认知却存在差异。有的地方认为石头为了显露自身从而召唤了海啸；有的地方的遇难者家属却将石头视为了象征亡灵的“空坟”，并每年进行祭奠；还有有些石头甚至被当地居民奉为守护海上安全的神灵进行了供奉。

为什么这些海啸石所承载的故事会各不相同？从中或许可以探索各地方包含海啸灾害的地区实况。本文在探讨这些的同时，将进一步分析这些故事的背后所蕴含的信仰及精神传承。

はじめに

テーマは「津波の語り」である。2011年に起きた東日本大震災で、三陸地方は多大な津波被害を受けた。震災以降この体験を風化させないようにと、体験者による「震災の語り部」活動が各地域で行われた。本稿は主に市の社会教育課や観光課を通して紹介していただいた三陸ジオパークや震災遺構のガイドの方に話を聞いた。

副題としている津波石とは、津波によって海から陸上へと打ち上げられた巨礫のことである。その存在が世に知られるようになった発端は、八重山列島の石垣島等に点在する巨石を調査した牧野清が、それらが津波によって海から陸上に打ち上げられたと推定し、1968年に自費出版した『八重山の明和大津波』で「津波大石」と呼んだことによる。

津波石は明治三陸大津波以降、地元で語られてはいたが、東日本大震災をきっかけに注目され、市の社会教育課や観光課等行政が「震災の語り部」活動の一環として関わるようになったため、現在では震災遺構のひとつとなっている。しかし、その扱いは地域の実態や被害状況によって違う。では、どのように違い、それぞれがどんな心性を表しているのか。その違いの奥には共通する心性があるのではないか。

本稿では、地域の実態や被害状況がどのように津波石の話に反映されているか探るとともに、語られた話の奥にある信仰や心意を明らかにすることを目的とする。

序章 問題の所在

1、先行研究

津波の伝承研究に関して、体験の記録はあっても、体験者の語りをもとに津波伝承の心意について考察した研究はほとんどない。津波による集落の移転について考察したのが柳田國男の「二十五箇年後」⁽¹⁾である。柳田は、高台移転した家

がまた浜辺に戻って住む実態について言及し、研究を引き継ぐよう山口弥一郎に進言した。そして完成したのが山口弥一郎著『津波と村』⁽²⁾である。山口はなぜ移転した村が現地に復帰するのか、宮城県から岩手県を経て青森県に至る海岸沿いの集落を歩き、被害の度合いは波高の高さ、湾形が絶対的なものではなく、湾の中でも、どの位置に住むか地形や地域の特徴を実感し、被害や移転の状況を聞き取ることで考察しようとした。

津波石について論じているのは気仙沼が故郷である川島秀一である。川島の著書『海と生きる作法—漁師から学ぶ災害観』⁽³⁾は東日本大震災後「津波をどう捉えるか」という考察の集大成と言える。海は与えもするが奪いもする。津波で奪われた命は「魚に食われ」「魚に成った」ことで大漁が約束されるという漁師の生命観、天運循環的な考え方について考察する。さらに「津波石」として伝承され得るには、その大きさだけでなく、その石にまつわる不思議な出来事がストーリーとして付加されていることも大事な要件だと説明している。では現実に、津波石にどのようなストーリーが付加されているのか、或いは可能性があるのか探っていきたい。

2. 研究の方法・資料

東日本大震災以降、震災遺構として注目されるようになったのが津波石である。津波石は岩手県田野畑村に2カ所、大船渡市吉浜、大船渡市赤崎、宮城県気仙沼市と計5カ所、すべて太平洋側のリアス式海岸沿いの地域に上がった。筆者は2013年、2022～2024年にかけて各地域を訪ね、主に震災遺構のガイドの方に聞いた話をもとに考察した。

田野畑村ハイベ海岸の津波石と気仙沼市唐桑の津波石は東日本大震災(2011年)で上がったものであり、吉浜の津波石は昭和三陸大津波(1933年)で上がったものである。それ以外は明治三陸大津波(1896年)で上がったものである。また、地域の特徴や津波の被害状況を知るために地誌や資料集だけでなく、各自治体や新聞社がネットで公表している情報を参考にした。しかし、時代や地域によって被害状況の公表の方法や算出方法が変わるため、本稿でも数字の扱いは統一していない。

大船渡市赤崎の被災の状況について、大船渡市立博物館で専門研究委員をされていた佐藤悦郎さんに紹介された『津波を見た男—100年後へのメッセージ—』

(編集発行 大船渡市立博物館 1997年)を参考にした。手書きの地図とともに津波直後の津波石の記録が残る貴重な記録である。筆者の山奈宗真は西閉伊郡遠野町出身であり、岩手県知事に津波の被害調査を志願し、委嘱状を手に40日間かけて岩手県沿岸約700kmを踏破して調査した。

第1章 岩手県田野畑村の津波石

1、地域の特徴

田野畑村の地域の歴史や特徴については『地域社会の変貌—岩手県・田野畑村をめぐる—』⁽⁴⁾という書籍とNPO法人体験村・たのはたネットワークの赤坂広太さん⁽⁵⁾にお聞きした話をまとめた。

田野畑村は地形的に崖、谷、急峻な山に囲まれた地域であり、夏に吹くヤマセという冷たい風の影響があり、田んぼで米を作って生活をする農村にはならなかった。羅賀(ラン・カー 坂を下るところにある海辺)、ハイベ(イラクサの生えるところ)、平井賀(ピラ・イカ 崖を越えていくところ)などアイヌ語の地名が残り、その地名からも過酷な環境を伺うことができる。

日本が近代化される戦後も、浜は半農半漁の生活であり、漁期は沿岸ならウニ、スルメ、昆布、ワカメなどの漁。休漁期間はジャガイモ、麦、稗などを畑で作っていた。また、女性の多くが山で木を伐り出す作業を担っていた。木材や木炭などに加工された木を、海岸からサツパ船(沿岸漁業で使う小型の磯船)で大型船に運び、宮古市で売るなど海運業に携わる人もいた。当時はその船の乗務員などが寝泊まりしたため、平井賀には銀行やパチンコ屋、食事のできる場所や居酒屋などがあり、奥まった地域にも関わらず、暮らすには困らない、にぎやかな場所になっていたという。

1970年代になると、山間地を利用した酪農や、観光ホテルの羅賀荘の社長を村長が務めるなど、雇用の潜在的源泉とした観光など、新しい事業に力を入れるようになった。現在では北山崎や鶯の巣断崖^{うすだんがい}からの展望、逆に観光船やサツパ船に乗って海側から断崖を見る観光が盛況となっている。

津波石のガイドは津波被害の実態や地球の成り立ちを学ぶ三陸ジオパークに登録されたNPO法人体験村・たのはたネットワークの下坂弘次さん⁽⁶⁾と前述の赤坂さんをお願いした。

2、津波被害状況

津波被害状況の記述は岩手日報社×岩手放送によるネット記事「碑の記憶」⁽⁷⁾と体験村・たのはたネットワークのパンフレットをもとにした。

○明治三陸大津波によって沿岸集落の鳥越、平井賀、羅賀の多くの家と人々が飲み込まれた(死者128人、流出家屋32戸)。漁民集落のある入り江の峡谷の口はV字型をしており、津波がそこを襲ったとき波が高く押し上げられ、人々は逃げ場を失った。

○昭和三陸大津波では死者83名、流失家屋131戸。羅賀では波が22メートルに達した。

○東日本大震災での被害は、死者23人。行方不明者16人、負傷者6人(人口：3968人)。(平成23年9月20日現在)。田野畑村の全壊225戸のうち、羅賀は99戸、鳥越は121戸と、被害の97パーセントが羅賀と鳥越に集中している。

以下は田野畑での筆者による聞き取りである。

「津波が削った後の土地を見て、小さい頃の風景が戻って来たように感じた。流された宅地場所は、かつて昭和三陸大津波で被害を受け、長い間家を作らず、畑地となっていたところだった。それが、津波の被害を知らない新しい人が移り住む中で、開発されていったのだろう。津波を体験した家はぎりぎり津波の届かない場所に住んでいた。姉吉地区のように『ここより下に家を建ててはいけない』といった碑があれば建てなかったかもしれないがここには無かった。伝承していく大切さを感じた」(下坂弘次さん)

「撮った写真を見せながら)南の方の鶉の巣断崖というところから村の広報が撮ったものなんですけども、ドーンと波しぶきがあってますよね。この崖にバーンと波がぶつかって、当然ですけど、その時に集落はもうみんな壊されてめちゃくちゃになっていた」(赤坂広太さん)

3、津波石の話

羅賀地区の標高28mの地点には、明治の三陸大津波で打ち上げられたとされる津波石が残っている。推定重量約20トン。中に含まれるオルビトリナと呼ばれる有孔虫の化石から、この岩塊は津波により、以前の場所から400m西側まで移動してきたことがわかった。

長い間地元の人はこの津波石は山から落ちてきた石だと考え、そう伝えてき

た。そして近くにある大きな落石を津波石だと考えていた。実際、赤坂さんはお祖母さんからそう聞いていたという。近年、三陸ジオパークを推進するための調査で津波石の検証が行われ、石を取り違えて伝承していたことがわかった。

また、ハイベ海岸には東日本大震災で上がった津波石がある。波打ち際にあった宮古層群の大きな岩塊が大津波により、山側へ15m程移動して崖にぶつかって止まったものであり、推定重量は約100トン以上である。

4、津波石をどう捉えているか

羅賀の津波石のある場所は震災後、羅賀ふれあい公園として整備された。以前は災害と犠牲者を伝える津波記念碑は明治29年のものが羅賀地区に、昭和8年のものが平井賀地区に残っていたという。しかし、公園の整備とともに、ここにまとめられた。津波記念碑は波がここまで来たという目印だったのだが、東日本大震災ではそれを越えてしまったので、過去の記念碑の場所はそれほど意味をなさなくなってしまったからだ。津波犠牲者のお墓は個々にはあるが、行方不明者の方もいるので、お盆や3.11の慰霊の際、地域の方はここに集まって手を合わせる。ただ、遺族が高齢化する中でいつまで続くかというわからない。

一方、標高28メートルのところにある津波石は、津波がここまで来たということ伝える。

「明治の時にここ（津波石）まで津波が来たんだっていう認識が皆さんあります。そのため当時は、今見えてるお家ありますよね。高いところ、割と高いところにある方にしか（家を）建てなかったそうです。不便だけど（津波が）来るんだっていう認識はあった。そのため、みんな今現存して残ってるお家は、高いところ、割と高い。当時に比べれば割と高いところに作っていた」（赤坂さん）

この言葉からわかるように、津波石は津波がどこまで来たか示すものであり、家を建てる指標となった。しかし、津波被害を知らない新しく移り住む人々にその情報は共有されず、或いは知らされても、その意味することは共有できずに新しい住宅地が開発され、被害が発生したと言える。

田野畑村の宮古層群と呼ばれる地層では、3つに分かれた珍しい地層を見ることも出来る。日本初の恐竜の化石が発見されたのも宮古層群である。三陸ジオパークにも認定されていることから、地層や海側から見る崖、ハイベ海岸の化石

などから地球の成り立ちを学ぶ活動をしている。そこに津波や津波石といった震災遺構が加わり、今後は地震などのメカニズムを学ぶ素材としても期待されている。

化石の漂着の多いハイペ海岸は、流れ着いた化石が別の高波によって海中に戻るといった、漂着物が頻繁に動く場所である。地域の人々は、流れ着いた化石が津波で流されていったことを「海がもって帰った」と表現したという。沖縄宮古島伊良部には、竜宮の神が、人間によって半身になって焼かれたヨナイタマを取り戻すため、津波を寄せる伝説がある⁽⁸⁾。「津波によって海に戻す」という考え方は伊良部の人々もハイペ海岸沿岸の人々も似ている。川島の述べた海辺に住む人々の天運循環的な考え方と言える。

第2章 吉浜の津波石

1、地域の特徴

吉浜が大船渡市に編入される経緯については、『岩手県町村合併誌』⁽⁹⁾を参考にした。吉浜は岩手県の南の沿岸に位置する。気仙郡綾里村、越喜来村、吉浜村が昭和31(1956)年合併し、気仙郡三陸村となるが、昭和42(1967)年町制施行し、気仙郡三陸町となる。その後平成13(2001)年大船渡市に編入される。吉浜の産業は、主に漁業であり、特にアワビの漁獲が盛んである。

吉浜の津波石については吉浜津波石保存会の会長新沼秀人さんと、前述の佐藤悦郎さん、それぞれに話を伺い、新聞記事や資料を提供していただいた。

この地域の特徴的なところは海の近くに田畑が広がり、道路を隔てた一段高いところに住居が並ぶ職住分離の光景である。その経緯を記したのが「開墾碑」(水田復ふつきゅう整理記)と書かれた石碑である。

そこには、三陸大海嘯(津波)で家屋は破壊され人は死に、また田畑はことごとく荒れ果て松林や草原となり、水田は乏しくなったため、村長の柏崎亜太郎が面積11、88ha、水路1.45km余りの開墾と荒れ地復旧を当局に何度も申請し、許可を得て開いたことが記されている。『津波と村』⁽¹⁰⁾には「移転費用には義捐金の一部か、特志家の寄付などを充当する外は、全く貧しい人々の各自の支出によるもので、特に村に身を捧げるほどの熱意ある指導者のない限りは、村の移動も容易でなかった」と記されているが、吉浜では村長を会長とする河原耕地整理組合

の組合員15名が政府や国庫の補助金借用により工費4万円あまりかけて開墾した。その結果昭和の大津波では地元民の死者は4名。東日本大震災での死者は1名と減り、「奇跡の集落」として海外からの視察も迎えるようになった。この地の気概は津波石の保存にも発揮された。「作った石碑ではなく、自然の石だからこそ、教訓を伝えるには最もいい。永久に残すべきだ」と吉浜地区公民館と九部落会は2018年5月に津波石の保存会を設立し、市の補助金や寄付金、自主財源計220万円で保存のための整備を行った⁽¹¹⁾。

2、津波被害状況

明治三陸大津波では、震災前人口1059人、87戸に対して死者204人(19%)、流出家屋 35戸(40%)。昭和三陸大津波では、震災前人口959人、164戸に対して死者17人(2%)。うち地元民は4人。流出家屋13戸(8%)。うち10戸は低地。東日本大震災の死者は1人(0.1%)。他地域にいて遭遇した津波被害であった⁽¹²⁾。

3、津波石の話

吉浜の津波石は昭和三陸大津波で海岸から約200メートルの位置まで流されたとみられる花崗岩である。70年代道路工事で土中に埋められたが、2011年6月東日本大震災の津波で道路が崩れ、津波石が発見された。しかし、その経緯には因縁めいた話がある^{(13) (14) (15)}。

発見者の柿崎さんと柵木沢さん、木川田さんは幼いころ、津波石の周辺でよく遊んでいた。震災当日午前、柵木沢さんと柿崎さんは散歩しながら「津波石はどこに埋まっているんだろうね」「津波が来たらまた姿を現すだろう」と話していたという。

震災後、郷土史研究家の木村さんが中日新聞の取材を受け、そこで柿崎さんとお会い、お互い津波後、津波石を確認しに向向っていたことを知った。さらに知り合いの木川田さんは作業員として1975年前後、石を埋める工事に関わっていた。木川田さんは「当時、現場で『壊すか、埋めるか』と言われた。どうしても残したかったので、それならば埋めた方がいいと話した記憶がある」と新聞の取材に答えている。

そうして、柿崎さん、柵木沢さん、木村さん、木川田さんは声をかけあい、4人で津波石を探しに行き発見した。津波石が現れたいたために津波を呼んだようだ

と柗木沢さんは不思議な感じを抱いたという。

津波石は縦3.65メートル。横2.75メートル。高さ2.1メートル。重さ30トン。「津波記念石」の名と「前方約二百米突吉浜川河口ニアリタル石ナルガ昭和八年三月三日ノ津波ニ際シ打上ゲラレタルモノナリ 重量八千貫」と由来が刻まれている。

4、津波石をどう捉えているか

保存の経緯については1で記した通りであり、今後の目標としては「これから育っていく子どもたちにも津波の教訓を伝えてほしい」と、震災遺構の機能を發揮することを期待されている。

石に対する信仰は見られない。工事の邪魔であれば埋めるといった判断を1970年代には行った。しかし、2021年、津波石の再出現は「石が現れたいために津波を呼んだ」と不思議な話として捉えられ語られた。宮古島伊良部の伝説では、焼かれたヨナタマを取り戻すために竜宮の神が津波を寄せたと語るが、吉浜の津波石は自ら現れるため津波を呼びよせたという感覚と通じるものがある。

ただ、吉浜の特徴として村長を会長にすえ地域民の知恵で補助金を獲得し、職住分離を成し遂げ、その経緯を石碑に記録として残す地域ということにある。津波石は津波の記録であり記憶である。記録を埋め記憶を遮断することへの反発や不安が津波を起こすイメージ、あるいは津波が来るのではないかという予兆となった可能性も考えられる。

第3章 大船渡市合足（あたり）の津波石

1、地域の特徴

合足の津波石については前述の佐藤悦郎さんに話を伺った。合足の津波石と言われるが、実際に津波石が打ち上げられた場所は陸前国気仙郡赤崎村字外口ノ内小濱（現 岩手県大船渡市赤崎町字外口）である。そして津波石とともに打ち上げられた遺体は気仙郡赤崎村字合足（現 大船渡市赤崎町字合足）の住民であった。佐藤さんは

「合足の集落というのは川沿いで、40年も前は、この地域の人を擲擧するよ
うな形で『あたりなかつたり13軒』って言ってたんです。小さいことを擲

掬うために言ったのかなと思ったんですけど、明治の大津波では13軒あって12軒流された。とてつもない被害にあったんですよ」

と、津波の被害が現代にも伝承されていることを示した。

合足の地域の特徴は『大船渡市史』⁽¹⁶⁾の記載を参考にまとめた。明治の三陸大津波当時、合足は13戸129人の集落で、主な産業は漁業と製塩であった。藩政時代の記録によると合足は赤崎村の5カ所の製塩所のうちの1つであり、納められた塩は御塩船と呼ばれる藩船によって牡鹿郡の鹿股にある藩営倉庫に納入された。伊達藩では、国産増殖の一環として製塩を奨励し、業者には「御塩木山」と称して、特に山林伐採の権利を与え、功労ある業者(釜主)には賞金、商品を授与したという。製塩は山林伐採をして燃料を供給する。しかし、燃料の需給が追いつかず、十年もの間「休み釜」をする地域もあった。ところが、合足の集落では明治43年、専売制度のため廃止になるまで塩作りに携わっていた。そして製塩と輸送に都合の良い海岸に近い川沿いに集落を作り住んでいた。燃料を供給するため木を伐っていたことから、津波の勢いを止め減災に結び付くような防潮林は作らなかつたと考えられる。内湾の奥に位置する合足集落は川を伝わって威力を増す波をかぶり壊滅状態となった。そして、湾から外海に流された遺体は海の底からあがってきた津波石と合流し、海に突き出た場所にある外口に流れ着いたのである。

外口は海の近くにある地域であり、外口漁港があるので、主な産業は漁業であることは間違いない。現在、海から見ると山に連なり、そこを過ぎると畑と住居が点在するばかりである。現在も電車は通らず、岬の突端にある不便な場所という印象をもった。佐藤さんによると当時も今もそこに住居はないとのことだった。

この地域を回っていて気が付くのが、八大竜神やエビス神の石碑が多いことである。宝珠型(人が座っているような形)の石にはエビス神が直接彩色され描かれていた。この地域の海と信仰に関して、ここから少し離れた場所ではあるが、同じ三陸の海を漁場とした山田町の老人クラブの発刊した冊子⁽¹⁷⁾に以下のような記述があった。

「三陸の海は親潮(寒流)と黒潮(暖流)が交わって合流して太平洋に流れ出ていく。だから潮の流れは速く、少しの風にもすぐ波立つ有数の荒波であるが、暖寒両流が合い交わることから両流に棲息する大小の漁場が形成され

る。そのためこの地域にはエビス神が多く祀られ石像も多く見られる。また、有名な漁場として漁獲競争も激しく、それに伴って漁船の遭難事故による漁民の犠牲も多かったため、海を鎮める龍神信仰も盛んであり、それを示す話も伝わっている。

生死を分けるような大しけの時、船室において白川夜船をきめこんでいる船員がいる時は、この船は絶対転覆しないという言い伝えがあり、何も知らずに安らかに寝息を立てている者は、夢の中で竜神さあみやお船霊と楽しく遊び語り合っているのだから、怒鳴り声をあげて無理に起こすようなことはせず、自然に目覚めるのを待つのだと言い伝えられている。」

海という自然を相手にしながら、生きのびるため、そして少しでも多くの漁獲高をあげるため、エビス神や竜神への信仰心を育んだ地域なのだと読み取ることができる。

2、津波被害状況

前述の山奈宗真の記録によると、合足の被害状況は、

「流亡戸数 拾二戸・元戸数 拾三戸 潰戸数 三戸 死亡人口 七拾六人
(男 四十人・女 三十六人) 元人口百廿九人 打上浪 百尺 浪走り 五百間 塩竈流亡 壱棟」

と記述がある。残った家は1戸だけ、死亡76人というのは住民の6割にあたる。浪走り500間というのは約909メートル、百尺は約30.3メートルである。山名の手書きの地図には

「此濱ハ極裏濱ナリ平十五六尺ノ津浪アリ時々宅内ニ浸水ス」「昔野津浪ニ山手へ打上浪二十尺浪走りト云多分安政の津浪ナラン」

とある。津波常襲地であり、海岸近くには住まないなど用心はしていたのだろう。しかし、津波は川に沿って勢力を高めながら内陸部まで駆け上がり家々を飲み込んだと考えられる。

一方、遺体と津波石が流れ着いた外口の被害状況は、

「此所人家モ無耕地ノミ」

とあり、流亡戸数、潰戸数、流亡納屋、潰納屋、死亡人口に数の記載がない。深く切れ込んだ谷間を津波が駆け上がっていった。

3、津波石の話

「○字小濱ハ海岸口凡 二十五間計リ南向キナリ海岸ヨリ三十間余ノ所ニ海面ヨリ二十尺モ高キ耕地へ通路ハ卍印の石ハ長サ壹丈巾五尺五寸高サ五尺計リ大石激浪ニ打上ケラレ(海底の石)此海岸近傍ニ石○石の小ナルモノ多山ニ打上ケラレ在リ ○此所人家モ無耕地ノミ ○此印ノ所ニ人馬ノ死体多ク打上タル故ニ焼キタル所ナリ。」

と山奈は記録している。

現代の調査によると、合足の津波石は

「1.1 × 2.5 × 1.3 (高さ × 横幅 × 奥行) で3.6m³の体積を有する岩塊であり、10tの重量となる。この津波石はフジツボが付着していることから、もともとは海岸付近あるいは浅海底にあったことは確かである。」⁽¹⁸⁾

と海から上がった石であることが記されている。

山奈が被災者のいない外口を調査したのは津波石のためではなく、打ち上げられた人馬が焼かれたところだからである。合足の人々は遺体を外口で焼き、合足に埋葬した。佐藤さんによると、合足の生き残った人々は、津波で打ち上げられた津波石を目印として昭和40年代か50年代までは年に1回花を持ってお参りに来ていたという。2022年、合足の集落で育った90代の千代貢さんに話を聞いた佐藤さんによると、津波石について「ここには空の墓がある」と説明したという。

三陸大津波から86年、1982年刊行の『大船渡市史』に載った津波石は石碑の欄に記載されている。

「縦三メートル、横二メートル、高さ一メートル大の海石の上に無刻の石を建ててある。明治29年三陸海嘯に海底から押し上げられた石であるが、水際から約二百メートルの山林中に横たわる。里人龍神を祀って再びこの惨状を繰り返さぬ様祈ったものと伝えられ、龍神の石と呼んでいる。叢草に覆われた下にその大岩がある」。

津波石は津波にまつわる石だという認識があったものの、里人にとって竜神に祈る対象は無刻の石であり、津波石はその台座に過ぎない扱いだっただけである。

4、津波石をどう捉えているか

津波石をどう捉えるか2つの問題に絞る。(1)「空の墓」の意味 (2)津波石は龍神に祈る無刻の石の台座に過ぎないのか である。

(1) 「空の墓」の意味

新谷尚紀は『生と死の民俗史』⁽¹⁹⁾の中で石と葬送習俗について、例として死者に河原から取ってきた石枕をさせる習俗(大分県南海部郡水津村)や、埋葬する際、墓穴にお別れ石として石を入れる習俗(福島県耶麻郡高郷村)をあげ、産育習俗と葬送習俗に水辺の石が結び付く場合が多いと述べている。そしてその理由を「産育と葬送という境界的時空のなかで緊張と不安につつまれた人は、一種の境界領域としての水界からもたれされる石を身近におくことによって安定状況を得られる」とし、葬送習俗における水辺の石の効果として心の安定をあげている。

千代さんは「空の墓」と表現した。それは下に遺体は埋まっていないが手を合わせる対象であることを示していると考えるが、葬送習俗の中で遺体を埋めずに手を合わせる石として石塔婆があげられる。

新谷尚紀は同書の中で石塔婆について、平安中期の『栄花物語』や貴族の日記類、『今昔物語』などの記録から、石塔婆は来礼、墓参のための標識だけではないとして、「死者を送る緊張の中での一種の鎮めの意味があったのではないか。＜火葬地点に残っているであろう＞死者の魂や死霊の鎮撫とか鎮送という呪術的機能への期待があった」と述べている。

津波石は石塔婆のように作られたものではないが、合足の津波による死者を焼いた場所近くにあったことが山奈の記録に明記されている。集落の6割の住民が亡くなり、多くがそこに打ち上げられた。その遺体を故郷と離れた場所で焼く。どれほどの緊張と不安と悲しみがあっただろうか。その時、遺体を引き連れるよう海から陸に上がったのが津波石である。石は海と陸の境界にある。そこは生き残った住民と亡くなった住民の狭間である。生者は津波石に、心ならずも亡くなった死者の魂や死霊の鎮撫を心情的に託したのである。石に向かって手を合わせ、念仏を唱えることは自身の心の安定にもつながった。それが石塔婆を建てる習俗のない現代では「墓」という表現になったと考える。

(2) 津波石は龍神に祈る無刻の石の台座に過ぎないのか

海から拾い上げた石を神体として祀る行為は全国に見られる。それは折口信夫が

「海の彼方から常世に所属してゐるものが、此土地に現れて来るといふ事は、その形にそんな變化無しに、極近代迄續いて居て、いまだ或地方では、今現

に信じられて居ることです」

と「石に出で入るもの」⁽²⁰⁾で述べた考えに通じる。外口では津波被害はなかった。しかし、住民は打ちあげられた巨石や多くの遺体を見て、自然の強大な力とともに、神の存在をイメージしなかつただろうか。もともとエビス神や竜神信仰の盛んな地域であり、海上安全を司るのが竜神なのである。

野本寛一は『石の民俗』⁽²¹⁾の中で

「漂着神信仰と石や岩がいかに強く結びついているか(中略)。神の依り着く石は、基本的には、(中略)磐座なのである。」

と述べている。海から漂着した津波石は、80年後、石を戴いた状態で拝まれていた。無刻の石は目印として置かれたものであろう。台座となった津波石こそ神が降り立った磐座であり依代だったのである。

第4章 気仙沼の津波石

1、地域の特徴

気仙沼市唐桑の自然、産業、信仰、過去の津波被害については『唐桑町史』⁽²²⁾を参考にした。場所は宮城県最北端の三陸地帯に位置する。三陸ジオパークに属し、地球の活動によって形成された自然の造形を見ることができる。リアス式海岸を有する唐桑半島には太平洋に突出した御崎や、海中から聳え立つ折石、海蝕によってできた奇岩の隙間から潮を噴出する潮吹き岩、八幡太郎義家がこの岩に飛び乗り、岩の上で大石を手玉に取ったという俗説のある八幡岩、安倍貞任が戦に敗れ、隠れたといわれのある貞任岩など、観光となる岩も多い。

半農半漁の生業形態ではあったが、現在も漁業を産業の中心とし、遠洋漁業に力を入れた草分けの地域である。また、自然環境を生かした観光にも力を入れている。ここでは元漁師だった吉田俊男さん(70代)に話を伺った。

唐桑は世界三大漁場である三陸沖を漁場とし、原始時代からカツオやマグロを獲っていた形跡を残す。特にカツオ漁に関しては、延宝3年(1675)に紀州から漁船5艘を招き、毎日数百尾のカツオが釣れる溜釣りという技術を教えてもらったとする記録もあり、いかにカツオ漁が大事な収入源だったか伺い知ることができる。津波石について話を伺った吉田さんは遠洋漁業の元漁師であり、マグロを追い、長い時は5年間で2回しか家に帰れなかったという。

また、不漁や不慮の災難に備えて、自給自足の農耕生産も行う家は多くいたが、現在は農耕生産の発展が見られ、米、大麦、小麦、大豆、馬鈴薯、甘藷、大根、雑穀、野菜など大切な収入源となっている。

2、津波被害状況（気仙沼市唐桑）

明治三陸大津波では、震災前人口3947人、死者845人（21.4%）、流出全壊家屋214戸 半壊家屋12戸（棟数に占める被害の割合 43.7%）。

昭和三陸大津波では、震災前人口8687人、死者60人（0.6%）、流出全壊家屋15戸、半壊家屋9戸。

吉田さんによると、東日本大震災では、リアス海岸のため波が押し寄せ、集落では52世帯中44世帯の家屋が津波で流失した。さらに100人以上の犠牲者が出たとのことである。

3、津波石の話

地名から神の倉の津波石と言われる。一番大きなもので高さ約6m幅約5m。重さ約150トン。リアス式海岸は、海岸線に対して垂直に開き、湾口に較べて奥の方が狭く浅くなっているため、波高が急激に高くなり、大きな被害をもたらすことがある。神の倉の入江は奥まった場所にあるため、津波直後は津波石に誰も気が付かなかったが、漁師が自分の繫いでおいた船を見に来て初めて気が付いた。津波石は小さなものも含めると5個ほどあり、サンゴ虫の跡があるので海中にあったものだとわかる。

4、津波石をどう捉えているか

吉田さんは津波石を「寄り物だねえ」と説明した。寄り物にはエビス信仰が関わる。そこで、この地で語られた海に関わる信仰についてまとめる。

(1) 神社等の神聖な場所での信仰

唐桑には大漁祈願や海上安全にまつわる神社が多い。岬に立つ御崎神社は「おさきさん」の名で親しまれ、1000年の歴史をもつ。大漁祈願や縁結びにご利益があるとされる。境内には鯨塚と言われる2基の鯨供養塔と1基の鯨光徳碑がある。御崎神社では鯨が難船を救助したと伝え、鯨を御使い霊魚としている。昔は御崎神社の氏子はクジラを食べなかったと言う。また、鳥居横境内に臨む2、3

尺ほどのくびれを持つ石はエビス石と呼ばれ信仰の対象となっている。

さらに、御崎神社境内北の方の海岸にある30m以上(三十余丈)積み重なった岩頂にある泉水は日々泉と呼ばれ、毎年正月にこの水を汲み大元祭を勤む。冬至の中の丑の日には五穀の種物をこの浄水で洗い清め、境内にある竜岩石の上で干す。この井戸の水は悪気を除く霊水と言われている。

小鯖港金毘羅神社右側には八大竜神という石に刻まれたものがある。古来早魃の時の雨乞い祈願の習俗があり、また海神として竜宮・龍神信仰の対象となり、船乗りや漁業者の信仰が厚い。昔和船時代の操業時に、海色の見分け方を重視し、緑・浅黄・紺・桔梗色など沖に出るにつれて変わる目安を、海神すなわち竜神様の仕業として海上安全を念じ、信仰したものと考えられる。

漁民にとって大切なことは海上安全と大漁である。安全祈願として八大竜神と鯨塚が拝まれ、大漁祈願として御崎神社とエビス石が拝まれる。さらに、正月に浄める力を期待したものが日々泉である。これは若水取りのような、新たな力の再生も願っていたのではないかと考えられる。

(2) 偶像への信仰

吉田さんの話によると、津波石について話を聞いた入江に、ホテイ像が祠に置かれ、祀られていた。もともと小さい像が流れ着いたのを「おエビスさん」と呼んでいたのだが、津波で流され、新しいホテイ様が流れ着いたのだという。町内の会長が祀ろうかと提案したので、そこに祠を建て一緒にして祀ったという。

「エビス様が寄り物だとかね、ホテイ様が寄ってきたり、そういう風な、寄り物に関しての気持ちっていうのはありますね」

と吉田さんは話したが、ホテイ様を祀った行為は「偶像信仰だ」と説明した。実際、吉田さん宅に火の神様である荒神様の像があり、それを信仰する他地域の漁師は漁で唐桑を訪れた際、「拝ませてくれ」と来るのだという。

(3) 寄り物への信仰

「エビスさまっていうのは、流れている流木があると、それに小魚がつくのね。それに大きいシイラとかついて、それにカツオがついて、それにカジキが付く。そういう流木、流れ物っていうのは信仰の対象だったんだね。流れてくるものはおエビスさんって、漁をさせる神様だってねえ。信仰の対象だねえ」

と吉田さんは話した。流れ物は寄り物と同じだと考える。寄り物は魚や石や木な

どあり、全国のエビス社のご神体が海や浜で拾われた石である例は全国にわたって見られるように、豊漁や幸運を呼ぶ授かりものであった⁽²³⁾。

(4) 津波石をどう見るか

海辺に置かれた「おエビスさん」が津波で流された代わりにホテイ像が流れ着いたり、海辺は常に移動している。流れ着いたホテイ像が祀られたのは仏像だからと説明されたが、海から浜に寄ってきた神像や仏像を意味のある寄り物、授かり物と捉えたから浜に祀ったと考える。

吉田さんは「津波石も寄り物だ」と語った。津波石を寄り物と説明する心意には、ただ漂着したのではなくて、海の意味や力を感じているということではないか。それにも関わらず信仰の対象とならないのは、仏像でも神像でもなく結局は石であるという現代的認識に加え、人を象った、例えばくびれなど持った形をしていないからだと考える。宮古島伊良部の津波石は真ん中がくびれて、まるで帯をしめているような様子から「帯岩」と呼ばれ、津波後の新しい集落の「島建ての岩守護神」として信仰の対象となった⁽²⁴⁾。御崎神社のエビス石はくびれをもち、ヒトガタと認識されたため神社に持ち込まれ参拝の対象となった。唐桑には観光となる岩が多く存在するにも関わらず、神の倉の津波石は神をイメージさせる形を持たない。さらに、上がってきた場所は、ゴツゴツした岩の並ぶ、人が通らないような奥の入江である。だから、唐桑の津波石は自然の力を示す震災遺構としてのみ存在している。

第5章 まとめ

津波石を見た時、こんな大きいものを波は動かすのかといった驚きは誰でも感じる。津波石への対処は地域ごとに異なるが、行政はこの驚きを根拠に津波石を津波遺構として扱っていることが確認できた。自然の威力を実感させ、羅賀の津波石のように、津波の到達点を示すことにより、津波からの避難も誘導もできる。また、安全を考慮せず土地を開発することを止める目安にもなるだろう。

伝承されるには、付加される不思議なストーリーが必要だと川島は説いたが、ストーリーが付加されたのは吉浜の津波石と合足の津波石である。

吉浜は村長、村民が協力し、職住分離の高台移転をすることで東日本大震災でも被害を最小限に抑えることができた。それは成功した物語として海外に紹介さ

れた。高台移転の有効性と難しさを論じた柳田や山口の研究の望んだ事例がここにあると言ってよい。そして、津波後姿を現した津波石は自然の脅威を示す象徴として存在している。これはこれで伝承されるべきことである。同時に、津波石が姿を現すため津波を呼んだのではないかという不思議な話が語られたのは興味深いことである。

これは伊良部のヨナイタマの伝説と同じ、陸地から呼ばれた海が波を寄せ「取り戻そうとする行為」が津波であるという心性であり、ハイベ海岸の津波で流された化石への心性と重なっている。海に神のような意思を見るのである。「取り戻す行為」は「寄せる行為」と対照的である。気仙沼唐桑のホテイ像は、海が「おエビスさん」を「取り戻した」代わりに同時に「寄せた」ものである。海は「取り戻す」と「寄せる」を交互に行う。川島は「奪う」と「与える」という言葉で漁師の天運循環的な考え方を説明したが、漁師でない海辺に生きる人びとの中にもそういった考えはあるのではないだろうか。では、その循環の中で、海が津波石を陸に寄せたとしたら、何を取り戻したのか。

今の時点で考えられるのは人の命である。異なる言い方をするとしたら、海は人の命を奪う代わりに津波石を差し出したと言える。その時、津波石は鎮魂の機能をもつ。合足の津波石は「空の墓」と表現されることで鎮魂という心性を表している。さらに、竜神の磐座と見なされ、海上安全祈願という信仰の対象となったことも、海の意思を感じる心性からの行為であろう。ただ、他の津波石に鎮魂や海上安全の心意が加わるかどうかは発見の状況や形が関わることは唐桑の例からもわかることである。

おわりに

三陸海岸にある津波石は地形や職業など、地域の実態や被害状況が反映されて語られていた。多くの犠牲者を出した合足では津波石は鎮魂の心意で語られ、遺体が上がった外口では海上安全が祈られる。しかし、犠牲者が多く、海と関わりの深い気仙沼であっても、人が通わない奥の入江に、気が付いたら上がっていた津波石では意味を持たせて語ることは困難である。

しかし、どの地域においても津波も波の一形態であり、海辺に暮らす人々は、海の持つ特性として捉えている可能性があること、その上で何らかの意思を感じ

ていることを確認した。では、津波石が鎮魂の心意で語られることは、三陸海岸以外の地域でもありうることなのか、次の課題としたい。

注

- (1) 柳田国男「二十五箇年後」初出「豆手帖から」『東京朝日新聞』所収1920年（『雪国の春』角川ソフィア文庫1956年）
- (2) 山口弥一郎『津波と村』石井正己・川島秀一編集 三弥井書店 2011年
- (3) 川島秀一『海と生きる作法—漁師から学ぶ災害観』富山房インターナショナル 2017年
- (4) J. H.、ベイリー著、長田攻一訳『地域社会の変貌—岩手県・田野畑村をめぐる—』早稲田大学出版部 1996年
- (5) NPO法人体験村・たのはたネットワークガイド赤坂広太さん30代男性 2024年筆者による聞き取り
- (6) NPO法人体験村・たのはたネットワークガイド下坂弘次さん70代男性 2013年筆者による聞き取り
- (7) 岩手日報社×岩手放送「碑の記憶」田野畑村鳥越・鳥越ふれあい公園 (<https://www.iwate-np.co.jp/content/ishibumi/>) 2024年8月27日閲覧
- (8) 遠藤研究室発刊『平良市北部の民話』掲載話 1997年3月（『沖繩伝承話資料センター』より資料提供）
- (9) 岩手県総務部地方課『岩手県町村合併誌』（1957）フリー百科事典『ウィキペディア(Wikipedia)』2024年8月27日閲覧
- (10) (2)と同じ
- (11) 「津波石保存等の工事費支援に関する要望書」2016年年8月5日
- (12) 碑の記憶、岩手日報社×岩手放送 大船渡市三陸町・吉浜地区 (<https://www.iwate-np.co.jp/content/ishibumi/>) 2024年8月27日閲覧
- (13) 「岩手日報」2011年6月10日
- (14) 「東海新聞」2016年12月11日
- (15) 「東海新聞」2019年年3月11日
- (16) 大船渡市史編集委員会編集『大船渡市史』第5巻 教育宗教信仰 発行大船渡市 1982年
- (17) 鈴木弘一『大沢東老人クラブ創立十周年記念発刊 漁民と信仰（大沢と七籠り）』発行山田町教育委員会 1991年
- (18) 八木下晃司「津波による礫堆積物の運搬および堆積—岩手県合足海岸の例—」『地学雑誌 Journal of Geography 110 (5) 2001』
- (19) 新谷尚紀『生と死の民俗史』木耳社 1986年
- (20) 折口信夫「石に出で入るもの」初出『郷土』第二巻第一—三號合併「石」特輯（特集）號 1932年6月（『折口信夫全集』第十五巻民俗学編1所収 中公文庫 1976年）
- (21) 野本寛一『石の民俗』雄山閣出版 1975年
- (22) 唐桑町史編纂委員会編纂『唐桑町史』発行宮城県本吉郡唐桑町 1968年
- (23) 川島秀一『津波のまちに生きて』富山房インターナショナル2012年（初出 石井正己編『昔話にまなぶ環境』三弥井書店 2011年）
- (24) 宮古島市ホームページ—「千年先の、未来へ。」エコアイランド宮古島 (miyakojima.lg.jp) 2024年10月9日閲覧